



## 学生時代に始まった結婚生活。妻の可能性も、子育ても、すべてを大切にしたい。

### 村上 好成 Yoshimasa Murakami

学術研究院教授(総合人間科学系) 全学教育機構長

京都大学工学部卒業。京都大学大学院工学研究科修了。工学博士。1984年より信州大学講師をつとめ、2007年同大学全学教育機構教授。2009年より同大学全学教育機構長。専門は高分子化学。趣味はBz、F1、スキー、テニス、登山等。

#### My Life Story

自宅は上田で、ウィークデーは松本に単身赴任中。能力ある女性の可能性を伸ばすには男性の力が必要だと考えている。スマホ世代の若者たちが生のコミュニケーション力に欠けることが最近の気がかりだ。



テニス同好会の先輩・後輩として出会った二人。学生時代から共に人生を歩んできた。



上田でやっと家族いっしょの生活。このとき生まれた次男も大学生になった。

#### 優秀な妻と学生結婚。二人で立ち向かった子育て

私たちは、学生結婚し、それぞれにマスターコース、ドクターコースに進みました。その後、私が信州大学に赴任したことをきっかけに妻も信州に来て、彼女は大学の非常勤講師になり、ここで長女を出産しました。

しかし、妻は海洋物理学という特殊な研究分野で、なかなか長野県で採用がなく、宮城県にある水産庁東北水産研究所主任研究員として就職することとなりました。最初の2ヶ月間の臨時採用の期間は、私が1歳の長女を一人で育児。本採用翌年には長男も生まれて、1ヶ月に1度、私が妻と子どもの元へ通う形で6年半、彼女の研究生活をサポートしました。

妻が2週間ほど観測船に乗る時は、私が1週間休みを取り、あとの1週間は大阪の母を呼ぶ形で、子どもを育ててきました。まだ「イクメン」なんて言葉のない時代、自分の研究はどうなるんだ、と喧嘩をしながらも、なんとかやってきました。

その後、私が上田の繊維学部に移るタイミングで、妻も中央水産研究所の上田分室に移り、そこで次男が生まれ、家族5人の生活になりました。

妻は昨年、定年退職を迎え、次男も大学生になったので、妻が月の半分く

らい松本に来る形でやっています。私は、自分よりずっと妻のほうが能力があると思っています。だから結婚や育児で可能性をつぶしたくない。その気持ちはずっと変わらない。離れ離れの生活でも乗り越えてこれたのは、お互いを理解し、尊重する気持ちがあればこそだと思います。

#### 子育てはお母さんが大事。そこで男はどうするか!

妻が理学博士を取得して大学の採用に応募していたとき、彼女は「女性だから」という理由で落とされ続けました。「君は旦那さんが勤めているからいいじゃないか。君を採用すると男性一人の職を取ることになるんですよ」と言われ、無然として帰ってきたことがありました。これじゃあダメなんです。

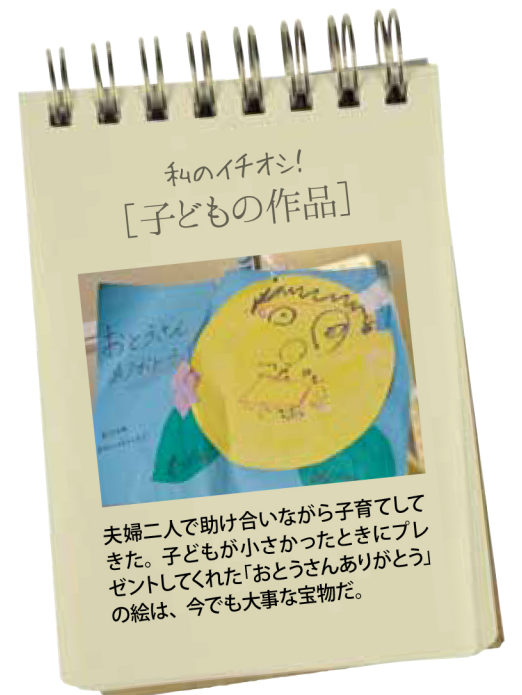
信州大学では、いま同じ能力であれば女性を採用しよう、という方針をとっています。このぐらいにしないととても女性教員を増やせません。女性を採用していかなければ、日本の社会は始まらないと思います。

妻は、いろいろな場面で差別を受けて来ましたが、子どもにとって「お母さん」が一番大事。子育ては女性を中心にならざるをえないのです。そうしたとき、男性への教育をこれからどうしていくか。男性諸君がどういう意識をもつ

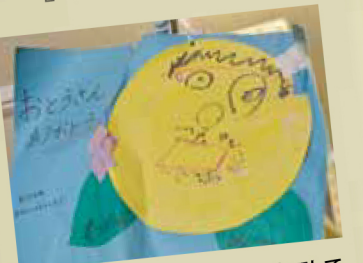
かはとても重要です。

ということで、私は、自分の授業のなかで「君たちは夜中におむつ交換したり、布おむつの洗い方とかを知っているのか」ということを話しています。「そういうことができないと女性から結婚してもらえないよ」と。

才能は男性でも女性でも伸ばしていくべきだし、女性だからというだけでチャンスを奪われるべきではない。どうしてもリスクを被ってしまう女性を、どう男性はサポートしていけるのか。体験者として、できるかぎりのこと伝えていこうと思います。



私のイチオシ!  
[子どもの作品]



夫婦二人で助け合いながら子育てしてきた。子どもが小さかったときにプレゼントしてくれた「おとうさんありがとう」の絵は、今でも大事な宝物だ。